

佐藤 彩花 (1510031)

〈序論〉

○研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボール競技における左45度からのロングシュートは試合で多く見られるが、防御者がたくさんいる中でシュートを打たなければならず、難しいシュートである。筆者も高校生のときからそのポジションで活動してきたが、様々な課題や問題に直面してきた。これらの課題や問題を解決していきたいと考えたことが今回の研究動機の大きな理由である。また、一緒に部活動を行っている中学生との練習に左45度からのロングシュートを取り入れたとき、色々な問題点が中学生に見つかった。しかし、筆者は自分のコツしか伝えることができず、詳しく把握することができなかった。このことから、改めて問題を把握しそれに応じた指導方法を考えていけば自分のコツも正確につかむことができるし、相手のコツも一緒に考えていくことができるのではないかと考えた。

本研究の目的は、一緒に部活動を行っているS君を対象として、S君がハンドボール競技における左45度のポジションからのロングシュートの姿勢や投げ方、技術などを適切に身につけていく過程を明らかにし、これらの向上をはかるためにどのような指導が有効なのかを分析していくことである。この際、2013年6月から12月までの指導場面の様子をビデオに記録し、関与観察しながら、S君を観察する中での気づきや、変化、エピソードなどを記していく。そして、原資料を全て編集し印象分析を行う。そこから特に変化の激しかった部分を共同観察して抽出し、エピソードと照らし合わせながらモルフォロジー的に観察し、それを印象分析していく。また、左45度からのロングシュートの目標像をS君と共に考え、その目標像に近づけるよう、欠点や修正すべき点を明確にし、S君に有効な指導法を明らかにしようとした。

〈本論〉

○事例研究・運動観察について

S君を対象として研究するにあたっては事例研究を行っていくわけだが、ここでは事例研究とそれに関係している関与観察、印象分析について述べていく。事例研究とは、1つの事例から間主観的に関与観察し、エピソードを記述していくものである。事例研究は、関与観察をしながら起きたエピソードを記述することが大切になってくる。特に運動観察においては、S君の観察について、運動モルフォロジー的考察法の必要性や、共同観察などを用いて客観的な運動分析ができることを明らかにした。このときマイネルの運動カテゴリーから「運動の局面構造」、「運動伝導」、「運動リズム」を用いて印象分析を行うことにした。

○ロングシュートにおける技の理想像と目標像

「運動の局面構造」の、「準備局面」、「主要局面」、「終末局面」において左45度からのロングシュートの理想像について明らかにしていく。「準備局面」では「助走」、「踏み込み」、「踏み切り」について、「主要局面」では腰のひねりと肘や手首への「運動伝導」、「終末局面」では「フォロースルー」と「着地」について構造の特徴を踏まえてまとめた。また、指導における目標像を「準備局面」では「踏み込み」から「踏み切り」の体重移動と体のひねり、「主要局面」では肩から指へのしっかりとした「運動伝導」と良い姿勢でのシュートの獲得、「終末局面」では踏み切った左足での「着地」とした。なお、筆者とS君の目標像を一致させるために、ノートの記述やコミュニケーションにより目標像のすり合わせを行った。また、S君の段階を示すためにも形成位相についても明らかにした。

○エピソード記述と指導法

S君を観察して行く中で最も印象的だったエピソードを4つ抽出して、印象分析を行い、考察した。そしてS君が形態を統覚していく中で「粗形態位相」から「精形態位相」へと発展する過程を局面構造を用いながら明らかにしていく。実際に行った指導法と、その指導法を行っての結果を以下に示した。

指導法	結果
「長座での対面パス」	・「運動伝導」が促され、腕を引き上げる動作が自動化されたと言える。
「トルネード投げ」	・体をひねって戻すときに勢いが生まれ、肩から指へと「運動伝導」ができるようになった。
「けんけんシュート」	・「踏み込み」、「踏み切り」の「運動リズム」を習得した。
「ボールを持たずにその場でシュート」	・踏み切った左足での「着地」を完全に習得することはできなかった。

〈結論〉

「長座での対面パス」、「トルネード投げ」、「けんけんシュート」の練習を行ったことでS君は目標像に近づくことができた。特に、「長座での対面パス」の練習に取り組んだときは、S君のテイクバックに大きな変化が見られ、体をひねるタイミングが早くなった。しかし「ボールを持たずにその場でシュート」では、S君の課題であった踏み切った左足での「着地」を完全に習得することができなかった。練習を重ねることで何度かできるようになったが、試合やシュート練習ではまだまだ両足での着地が多い。しかし、さらにこの練習を繰り返すことによって自動化され、S君のシュート技術の向上への手立てとなり得ると考える。また、習得したものはその内容に限らず様々なところで役立てられ、他の技術の習得や技術向上へとつながっていくと考える。 (引用・参考文献省略)